

国語

「言葉による見方・考え方」で 深い学びにいたる授業づくり

国語科における「深い学び」は、答えが一つに定まらない本質的な課題から始まります。複数テキストの比較や本文の記述を根拠とした対話を通して、学習者を自身の読みの再構成へと導きます。さらに、社会的な文脈をもつ表現活動や思考プロセスの振り返りと連動させることで、「言葉による見方・考え方」を確固たる実践的な力へと高めていきます。



県中教研 国語部 全県部長

長岡市立秋葉中学校 田中 綾子

「言葉による見方・考え方」を深める授業構成のプロセス

国語科において生徒を「深い学び」へ導くためには、単にテキストの意味を正しく読み取らせるだけでなく、生徒自身が「言葉による見方・考え方」を働かせ、探究を通じて思考を再構成するプロセスを構築することが不可欠です。

まず基盤となるのは、授業の軸となる「問い」の刷新と「多角的な視点」の導入です。事実確認にとどまる一義的な問いを排し、個人の価値観や論理構造そのものを揺さぶる「答えが一つに定まらない本質的な課題」を設定することで、生徒の能動的な思考が駆動します。さらに、視点の異なる複数のテキストを比較・批評する機会を設けることで、生徒は表現の意図や言葉の効果を相対的に捉え、多角的な視点を獲得します。

こうした思考の深まりを実効性のあるものにするのが、「目的のある対話」と「社会的文脈をもつ表現活動」の有機的な連動です。

単なる感想の共有に終わらせず、テキストの具体的記述を根拠に自他の解釈を客観的に検証し合う対話を通じ、生徒は思考の変容を実感します。その学びを「明確な読み手と目的をもつアウトプット」へ接続することで、文脈に応じた語彙やレトリックの選択を主体的かつ実践的に習得できます。他者や社会に向けて実際に言葉で表現してこそ、知識は本当の価値を発揮し、確固たるスキルへと高まります。

探究の終着点には、自身の思考プロセスや読みの変化を客観的に捉え直す「メタ認知的な振り返り」を位置付けます。「何を学んだか」という知識の獲得にとどまらず、「どう考え、言葉の捉え方がどう深まったか」という思考の軌跡を丁寧に言語化させることで、学びは他单元や日常の文脈でも活用できる汎用的な力として定着します。

「深い学び」を促す授業づくりの工夫

以下に工夫例を4つ紹介します。

1 「問い」の工夫

生徒の見方や考え方を揺さぶり、更新する問いの設定が重要です。単元を貫くオープンな問いに向き合うことで、生徒は「受け身の読者」から「能動的な探究者」へ変容します。

2 「思考ツール」の工夫

思考の可視化により、情報の整理や関連付けをスムーズにします。また、対話の際にも互いの考えを明確にし、質の高い意見交流を支えます。

3 「対話」の工夫

問いを軸に「自己・他者・テキスト」との対話を重ね、自分の考えの再構築を促します。異なる解釈や根拠に触れることで、生徒の中に知的な葛藤が生まれます。

4 「振り返り」の工夫

「なぜその解釈が可能なのか」「自分の読みのどこを見直すべきか」を吟味し、対話前後の考えの変化を自覚（メタ認知）させ

ます。この変容を実感する瞬間こそが、正に深い学びの核心です。



言葉の扱い方やものの見方が自分自身の思考や生き方に返ってくる手応えをいかにつくれるかが、授業づくりのポイント

各地区の「深い学び」にいたる学習過程

各地区の実践では、以下のような授業づくりを通して、生徒の「深い学び」を促します。

- 意図的な発問と既習事項を生かして自らの読みを立ち上げ、対話を通して思考を多角的に更新しながら、自分なりの「解釈」へと再構築・深化させていく授業
- 言葉を多角的に捉えて既習の知識や経験と結び付けた考えを構築し、他者の視点を通して教材を捉え直し、主体的に課題を解決・共有しながら学びを深化させる授業
- 課題に基づく解釈の交流や朗読の練り合いを通して、登場人物の心情や場面描写を深く追究し、協働して古典作品の魅力に主体的に迫る授業
- 既習の「読み方・学び方」を活用して自力で解釈し、「自己・他者・教材」との対話を通して描写に基づく読みを深め、自身の考えの広がりや深まりとともに学びの成長を実感する授業

国語 重点方針

言語活動を通して、国語で正確に理解し適切に表現する資質・能力を育てるために、話す、聞く、書く、読む力を育み、学ぶ意欲をもつことができる国語の学習指導に努める。

- 学び合う言語活動を通して、考えを広げたり深めたりし、思考力や想像力を育てる。
- 考えを明確にし、構成を考えて文章を書く力を育てる。
- 話の内容や意図に応じた表現力を育てる。
- 目的に応じて主体的に文章を読み、内容を的確に読み取る力を育てる。

国語 <上越地区／妙高市中教研>

11月27日(金) 研究会開催

研究主題：子どもが主体的・自律的に学び、深い学びを実現する国語科授業

単 元 名：「3年：状況の中で」
～故郷～

会 場 校：妙高市立妙高高原中学校

公 開：1学級

授 業 者：上山 晃平

指 導 者：上越教育大学 特任准教授 小出 信也 様
上越教育事務所 指導主事 草間 啓 様



研究推進責任者
妙高市立新井中学校
後藤 弘彦



教科・領域担当者
妙高市立妙高高原中学校
上山 晃平

「深い学びにいたる授業」を通して、こんな生徒の姿を目指します

生徒の読みを深める教師の発問を工夫することによって、生徒は与えられた課題に対して既習の事項を参考にしながら自らの読みを確立していく姿を目指します。また、仲間との対話やテキストとの対話を繰り返すことによって、生徒は自らの読みを広げたり、深めたりしながら、自分なりのテキストの「解釈」ができるようになります。

主な手立て（「学習過程」と「深い学びの技法」の関連）

生徒の学習過程



ポイント1（設定の過程→「深い学びの技法」のNo.1）

教師の発問から自らどの課題に興味関心を抱くか考え、既習の事項を参考に、課題解決の道筋を設定する。

これにより、生徒は自分がどの課題に興味関心を抱くのかに気づき、課題解決の道筋や方法を考えるようになる。

ポイント2（思考の過程→「深い学びの技法」のNo.8）

仲間の読みと自らの読みを比較し、自らの読みとテキストとの対話を繰り返し、読みを広げたり深めたりする。

これにより、生徒は多角的な視点で読み進めようとするので、自らの読みの浅さや狭さに気付くようになる。

ポイント3（表現の過程→「深い学びの技法」のNo.13）

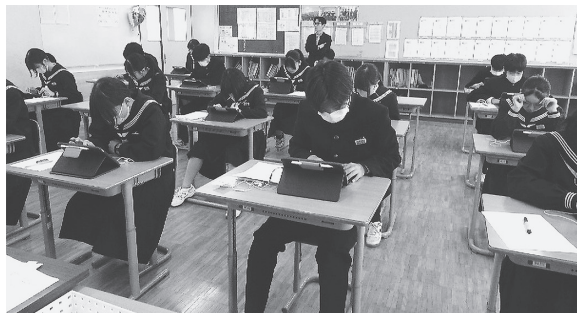
課題に対して客観的な理由や根拠を探し求め、それらを相手が納得できるように論理的に表現する。

これにより、生徒は既習の技術を活用しながら、自らの考えを言語化し、仲間と対話できるようになる。

単元（題材）の様子

テキストを読み、語句の意味を理解して、比喩的表現の読み替えを行うなど、基本的な読みを教師と共に行います。その活動を通して、過大解釈や誤読を防ぐとともに、生徒全員が同じ理解の下で課題に向かえる土台を作ります。

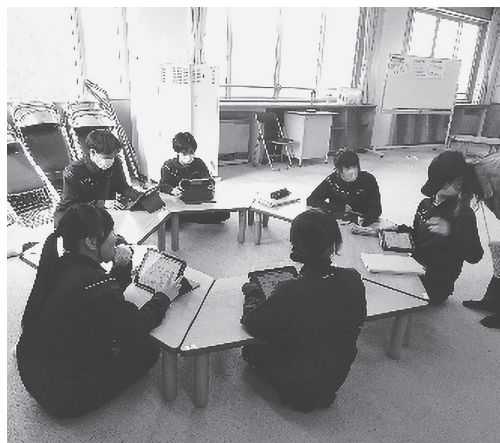
ポイント1



教師から生徒にいくつかの課題を提案します。この課題と発問の方法を工夫して行うことにより、生徒は自分が「どんな課題に対して興味関心を示すか」をメタ認知し、モチベーションを上げるとともに「目的意識」を高めると考えます。

さらに、生徒は課題解決のためには、どの資料やテキストを読むか、そのどこを読めばよいか、どんな方法を使えばよいかを考えるようになります。

ポイント2



仲間との対話です。与えられた課題に対する自分の考えと仲間の考えを比較する活動を通して、自らの読みを振り返るようになります。

これにより、もう一度テキストの読みに戻り、多角的な視点からテキストを読み直す活動につながります。その際、自らの読みの浅さや狭さに気付いたり、仲間の読みとの違いに気付いたりもします。

最後に生徒は課題に対する自らの考えを言語化して仲間と対話することができます。

ポイント3

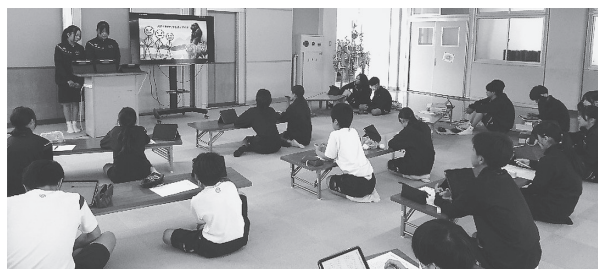
研究会

“故郷”の第2時では、工夫された発問により、生徒がモチベーションを

アップし、読む目的意識を高めて授業に臨む予定です。

仲間と対話する場面では多角的な読みをお互いに議論する授業を予定しています。

ポイント2・3



国語 <中越地区／燕市・西蒲原郡中教研>

10月29日(木) 研究会開催

研究主題：自ら課題を見つけ、学びに向かう生徒の育成
～「深い学び」の実現に向けた、

魅力的なゴール設定の工夫～

単 元 名：「2年：作品の魅力を読み解き、自分だけの
「偏愛ファンブック」を書いてクラスメイト
をアツと言わせよう」

～走れメロス～

会 場 校：燕市立燕中学校

公 開：1学級

授 業 者：齋藤 洋子

指 導 者：新潟大学 教育学部 教授 足立 幸子 様



研究推進責任者
燕市立吉田中学校

西脇 悠太



教科・領域担当者
燕市立燕中学校

齋藤 洋子

「深い学びにいたる授業」を通して、こんな生徒の姿を目指します

多角的な「言葉によるものの見方・考え方」を用いて文章を解釈し、自分の経験や知識と結び付けて考えをまとめます。そうしてできた多様な他者の考えや視点を知ることによって教材を捉え直し、考えを広めたり深めたりしていく姿を目指します。

生徒は自分が解決したいと思う課題・テーマについて考え、まとめ、伝え合うことによって、自分の考えの価値を実感し、自ら学びに向かうことができるようになります。

主な手立て（「学習過程」と「深い学びの技法」の関連）

生徒の学習過程



ポイント1（設定の過程→「深い学びの技法」のNo.1）

これまでに学んだ視点を生かして自ら見つけた課題を探究し、級友を驚かせるという魅力あるゴールを設定する。

これにより、生徒は、課題を自分事とし、到達した際の満足感を想起し、自ら課題探究するようになる。

ポイント2（思考の過程→「深い学びの技法」のNo.9）

既習事項を生かした課題解決の武器を提示する。

これにより、生徒は読み深める着眼点と考え方を組み合わせて、自分に合った方法で文章の内容の解釈、考えの形成を行うことができる。

ポイント3（解決の過程→「深い学びの技法」のNo.18）

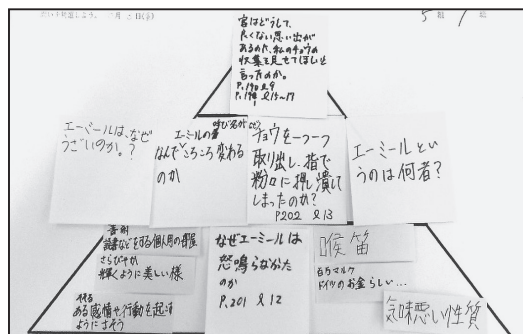
自分の学びがメタ認知できる振り返りと、目的をもった対話場面を設定し、課題解決につなげる。

これにより、生徒は学びを蓄積し、自己の学びの変容をメタ認知し、課題や気づきを更新できる。

単元（題材）の様子

生徒は作品をおおまかに確認したあとで、自ら見つけた課題（解決したい問い・作品の魅力）を設定します。自身の気づきやひっかかりと、これまで学んだ「ものの見方」とを結び付けて課題設定、選択するために、導入の段階で作品と深く対話することとなります。

生徒の設定した〈課題〉を起点とし、深めた解釈を成果物に表現して交流するというゴールは、単元を学習する意義、作品への興味や解決したい願いをもちながら主体的に探究する姿につながります。



ポイント1

読み深めのための「ものの見方」と「ものの考え方」を提示します。ものの見方は、生徒と既習事項を確認しながら「四つの目」で整理してきたものです。これらの武器を渡し、探究する課題や方法を生徒に委ねます。そうすることで、着眼点、課題への迫り方にずれが生じ、同じ作品を読んでも多様な考えが形成されると期待します。

これらのことにより、多様な考えが表現された成果物が完成し、それらを基に対話することで一人一人の考えが広がったり深まったりします。

ポイント2

物語の読解レンズ			
設定～作品全体に関わる主目～			
時	場所	登場人物	語り
【鳥の目】～鳥のように大空から全体を俯瞰する～			
【魚の目】～魚のように流れを予想し、変化を捉える～			
【虫の目】～虫のように近づいて読む～			

作品との対話が可視化できる分析シートを用意します。自己のつまずきや疑問点、分かったことや気づきをすぐに記録しメタ認知することで、〈問い〉や気づきの更新、次に読むべき箇所や対話すべき相手を認識できるようになります。

今日の探究でわかったこと・答え	振り返り（どんな視点でこうやって考えたらどうなった。）＋先生にSOSあれば！
- 気持ちの変化があまり見つけられない - 感情を表に出したくなさそう - 自分が評価されたことと暗い目	杏里目線で書かれてるから昇平が「見つけにくい？」 7.13に「それ」は「現像」に「123」! 次回の問い・テーマ 気持ちの変化について

ポイント3

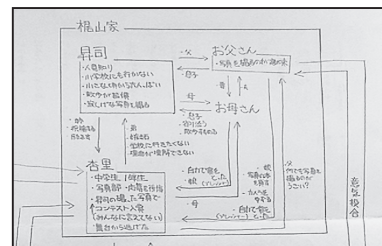
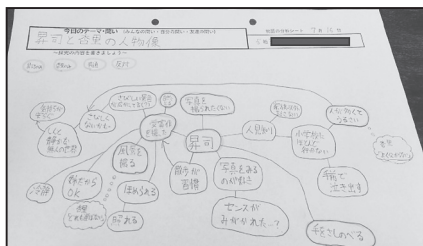
振り返りの内容に応じて必要な対話を設定します。

これにより、生徒自身が目的をもって対話し、他者の考えやその根拠を知り、新たな視点をもったり、自分の考えを広げたり深めたりすることができます。

研究会

研究授業
当日は“走れ
メロス”にお

ける個人での課題探究を仕上げ、成果物の作成に取り組む様子をご覧ください。



～2年生最初の物語単元「足跡」での分析シート～

国語 <新潟地区／新潟市中教研>

11月5日(木) 研究会開催

研究主題：学び合いを通して、生徒が言葉による見方・考え方を
使って考えを深め、自らの成長を実感する国語科指導

単 元 名：「1年：いにしへの心にふれる」蓬萊の玉の枝―「竹取物語」から
「2年：いにしへの心を訪ねる」扇の的一―「平家物語」から

会 場 校：新潟市立内野中学校

公 開：2学級

授 業 者：伊原 和歌子・小林 大晟

指 導 者：新潟市教育委員会 指導主事 小林 圭一様

新潟市教育委員会 指導主事 荒澤 寛美様



研究推進責任者
新潟市立関屋中学校

伊藤 篤志



教科・領域担当者
新潟市立内野中学校

川瀬 智子

「深い学びにいたる授業」を通して、こんな生徒の姿を目指します

生徒が、お互いの解釈を交流したり、アドバイスし合ったりすることで意欲的に古典作品の魅力に迫っていく姿を目指します。「蓬萊の玉の枝」では、人物の行動の理由や心情を考えることで、かぐや姫という人物への理解を深めていきます。多様な考えの出るような課題を工夫して提示します。「扇の的一」では、具体的な場面の中から個人・グループで考えた「聴かせどころ」をどのように朗読すればよいかを考え、表現していきます。聞き合いアドバイスし合いながら、朗読を練り合い練り上げ、「扇の的一」の魅力に迫っていきます。

主な手立て（「学習過程」と「深い学びの技法」の関連）「扇の的一」の実践

生徒の学習過程



ポイント1（設定の過程→「深い学びの技法」のNo.3）

・「聴かせどころ」や「見せ方・聴かせ方」を検討するための観点を提示する。

これにより、生徒は実際の様子が目に浮かんだり、臨場感が生まれたりする表現に気付きやすくなり、またその魅力が伝わる朗読の仕方を工夫する手がかりを得ることができる。そして、目的意識をもって主体的に古文を朗読することができるようになる。

ポイント2（思考の過程→「深い学びの技法」のNo.8・10）

・「聴かせどころ」を共有し、その聴かせ方を練り合い、練り上げる活動を設定する。

これにより、生徒は「扇の的一」の多様なよさに気付き、それを朗読で表現する方法を考えて、アドバイスし合いながら表現方法を練り合い、朗読を創り上げていくようになる。

ポイント3（表現の過程→「深い学びの技法」のNo.9）

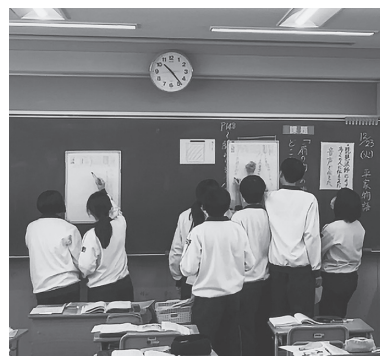
・朗読を創り上げる活動を振り返り、作品の魅力に迫る活動を設定する。

これにより、生徒は本時の活動を振り返り、「扇の的一」の魅力を表現するために大切なことをまとめ、次の朗読発表会に向けての意欲を高めていく。さらに、「扇の的一」の魅力をより実感していくようになる。

単元（題材）の様子 「扇の的」の実践

「扇の的」の「聴かせどころ」を考え、それを朗読で表現する活動を設定します。〈情景〉〈動作〉〈心情〉という観点に沿って「聞いただけで映像が浮かぶ古文」を探して互いの考えを伝え合い、魅力が伝わる朗読の仕方を考えます。また、〈声の出し方〉〈間の取り方〉〈表情〉〈身振り〉という観点に沿って「見せ方・聴かせ方」を考え、朗読の記号で可視化します。これにより、思考・表現の手がかりを得て、「扇の的」の魅力を主体的に伝えることができます。

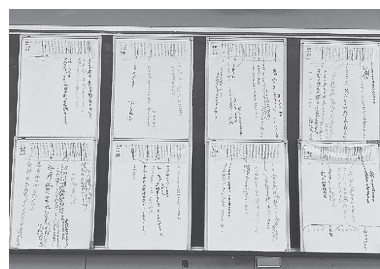
ポイント1



個人で考えた聴かせどころとその理由を互いに伝え合い、さらに共有ノートの本文上で一覧できるようにすることで、「扇の的」の異なる多様なよさに気付くことができます。

また、グループ間で朗読を交流し、アドバイスし合う活動を設定することで、仲間とともに練り上げ、互いの朗読の仕方を比較しながら、より魅力の伝わる朗読を目指すことができます。

ポイント2



仲間との話合いや朗読の練り合いを通して、どうしたら「扇の的」の魅力を「聴かせる」ことができるのかを個人でまとめることで、次時の朗読発表会への意欲を高めます。さらに、古文の読解や朗読発表会を通して得た気づきを踏まえて、『なぜ「扇の的」が今も残っているのか』という単元を貫く学習課題に迫っていきます。これにより、得た知識や気づきを活用して思考を深めることができ、単元のゴールに向かって見通しや問題意識をもって学習に取り組むことができるようになります。

ポイント3



「蓬萊の玉の枝」の実践

ポイント1

思考・解決の過程→「深い学びの技法」のNo. 2

生徒から出された様々な意見を「自己」「求婚者」「翁・媼」という観点を示し、それに沿って分類させることで、多角的に議論を深められるようになります。

ポイント2

解決の過程→「深い学びの技法」のNo. 9

これまでに多様な観点から考えてきたことを踏まえて、かぐや姫の言動から本時の課題について、自分の考えを表現し、自分なりのかぐや姫像を構築するようになります。

研究会

・1年生「蓬萊の玉の枝」では、言動に隠されたかぐや姫の心情を探り、人物像について考えを深めていきます。2年生「扇の的」では、ロイロノートや模造紙を使って、思考の可視化を図り、朗読を練り合い、練り上げていきます。

国語 <下越地区／五泉市・東蒲原郡中教研>

11月20日(金) 研究会開催

研究主題：身に付けてきた読みの力を活用し
自己・他者・教材とつながることで
学びを実感できる国語授業

単元名：「1年：視点を変える」
～少年の日の思い出～

会場校：五泉市立川東中学校

公開：1学級

授業者：野上 日和

指導者：新潟市立宮浦中学校 教頭 佐久間 奈々子様



研究推進責任者
五泉市立五泉中学校
後藤 陽子



教科・領域担当者
五泉市立川東中学校
野上 日和

「深い学びにいたる授業」を通して、こんな生徒の姿を目指します

3年間の授業を通して体現したい生徒の姿は、自力で教材を読解し、他と対話することを通して考えを広げ深め、自己の学びを実感する姿です。そのために必要なことは、生徒がこれまで習得してきた「読み方」「学び方」を学習の中で活用し、自分の考えが伝わったり明確になったりする経験を積むことだと考えました。生徒が「自己・他者・教材」との対話を通して、描写を基に捉えた自分の読みをより確かなものにしていく「学びを実感する姿」を目指します。

主な手立て（「学習過程」と「深い学びの技法」の関連）

生徒の学習過程



ポイント1（設定の過程→「深い学びの技法」のNo.1）

学んだ知識を活用して課題や目標を設定する。

これにより、生徒は自分の追究課題を確認し、それに適した読解方法を自分で選び活用しながら自力で課題解決できるようになる。

ポイント2（思考の過程→「深い学びの技法」のNo.8・15）

仲間や教材と対話する中で出会う多様な考えを比較・検討しながら自己の考えを広げ、深める。学んだことを整理し、自分の言葉でまとめて収束する。

これにより、生徒は自分の課題に対する考えがより明確になるとともに、新たな視点や学び方、表現方法を習得できるようになる。

ポイント3（表現の過程→「深い学びの技法」のNo.18）

身に付けた「読み方」「学び方」をスタディ・ログに記録し、次の学習につなげる。

これにより、生徒は「何ができるようになったのか」「何が分かったのか」を自覚することができ、その学びを次の学習に生かすことができるようになる。

単元（題材）の様子

蓄積してきたスタディ・ログを活用し、自分なりの読み方で目的をもって教材を読み進めます。着目した視点（天気、色、象徴アイテムなど）から、人物の心情などの読解を深めます。

初めに最終課題（この題材では「本の帯」）を提示することにより、生徒は自分で文章から言葉を拾いながら読むようになります。

ポイント1・3

物語（読み方・学び方・評価・視点）

- ① 読めないから、分からない言葉を探る
 - 分からないから単語をすくい出せるように単語の意味を横に書いておく
 - ② わきお読み
 - 疑問が感想を書き込む
 - わきおをしながら登場人物の整理などを図表化する
 - ③ 導入部分
 - 登場人物の整理
 - ④ 展開部分
 - 登場人物の整理
 - ⑤ クラウド
 - 登場人物の整理
- 表現技法の着目も!! (対比、排比)

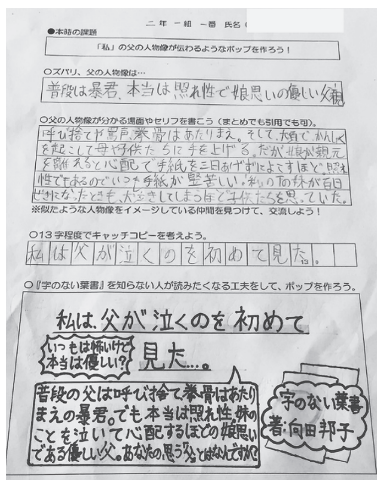
教科書に「分かったこと」「疑問」「思ったこと」を書き込んでいくこと（通称わきお読み）で思考が整理されたり、つながったりします。その書き込みを全文読解シート（教科書の拡大）で共有します。シートの前で自然に対話が生まれます。全体を俯瞰することができ、仲間の考えに触れることで考えが広がり、深まります。

また、これらの書き込みや対話を通して、説明文や他の教材の読解においても批評的な読みができるようになります。

ポイント2

最終課題の「本の帯」に取り組みます。最終的な自分の考えを短い言葉で表現することで、思考力・判断力・表現力がより磨かれます。また、前回の物語教材では「ポップ」でまとめ、系統的に取り組んでいくことで、読解の視点が増え、表現力も鍛えられていきます。

ポイント2



単元の終わりに読み方や学び方を実感できる振り返りを行います。学習を通して有益だと感じた読み方や学習の進め方（学び方）をスタディ・ログとして記録し、蓄積します。

これにより、この後の学習で、生徒が自分の学び方を自分で見直し、いつでも活用できるようになります。

ポイント3

研究会

“少年の日の思い出”第6時では、最終課題の「帯」につなげるため、帯で使う場面や、その場面を選んだ理由（自分の見方や価値観）を、対話を通して明確にする授業を予定しています。

ポイント2

教科書や全文読解シートを読み返したり、友達や自己と対話をしたりして考えを深めていく姿を目指します。

